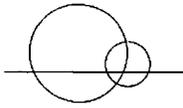


〈論文〉



## 山田良政伝の系譜

東亜同文書院大学記念センター  
リサーチアシスタント 石田卓生

### はじめに

孫文の革命活動の協力者として著名な山田良政は、1900年孫文による革命活動のひとつ惠州事件に参加した末に清軍によって殺害されたとされる。かれは、日本からみれば不遇な時期の孫文を命がけで助けた日中友好を象徴する人物であり、中国側からみれば、孫文に心服し革命活動に参加した外国人である。こういったことは日本では「先覚者」、「熱血」、「仁義」などといったことばとともに美談としてあつかわれ、中国では美談とともに日本人ですら革命に結集させたという意味で孫文の偉大さを高めたり、あるいは中国における革命活動の意義深さを知らしめたりする具体例となってきたのではないだろうか。孫文には山田のほかにも日本人の協力者が存在していたし、命を落としたものもいた。そのなかでも、孫文自撰自書による追悼石碑にあらわれているように山田良政への評価はきわめて高いのであるが、その理由のひとつは、具体的にどのような功績があったのかということよりも、なによりも革命の殉教者であるという点にあるだろう。

この殉教者山田良政を成立させる上で最も重要であるかれの死、つまり殉教する最期の状況については、簡便な紹介から学術的なもの、また本格的な伝記まで、その内容に大きな違いはないものの、後述するように細々とした相違点がみられる<sup>1</sup>。さきに記したように、山田良政はその悲劇性故

に高い評価をうけていた側面があったのであるから、悲劇を形作る惠州事件での最期について、実際にどのようなものであったのかという事実確認はもちろん、さまざまな伝わり方があるならば、それらがどのようなもので、またどのように伝わってきたのかということを確認しなければならないだろう。

以上のことをねらいとして、本稿では、各良政伝中のかれの最期に関する記述を比較していく。

なお、良政を伝えるもののなかには、中国語でのものや弟の純三郎などによる公的もしくは私的な口述もふくまれるが、本稿では成文化され、現在でも入手あるいは閲覧が容易な日本でのものを用いた。

## 2. 戦前における良政伝

### A. 洪兆麟証言以前

まず、戦前のものをみていく。この時期のものは、「洪兆麟証言以前」と「洪兆麟証言以後」のように、洪兆麟証言によって山田良政死亡が確認されたとする状況の変化に因する類別のほかに著者による類別がある。それは、山田良政を実際に知る著者によるものとそうでないものの別で、宮崎滔天、孫文が良政を実際に知るものとなる。

(1) 宮崎滔天『三十三年之夢』（『二六新報』、1902年）

惠州の事了りて後数月、革命敗軍の將鄭弼臣〔鄭士良〕君逃れ来る、胡服を脱して洋服を着け、

弁髪を絶ちて散髪となる処、恰も別人を見るが如し、実に人をして感慨に堪へざらしむ、彼れまた一悲報を伝えて曰く、革命軍の惠州城に迫るや、日本の同志山田君来り投じて之を助けり、而して三州田に返さんとするに及んで、其踪跡を失す<sup>2</sup>

(2) 宮崎滔天「清国革命軍談」(『東京日日新聞』、1911年)

其次に記念すべき人は、日本同志の一人山田良精〔政〕である。この人は終に単身革命軍に投じたが、死生行方ともに今日まで不明である。多分戦死したのであらう。<sup>3</sup>

(3) 孫文「山田良政君碑」(東京 全生庵、1913年2月27日)

山田良政君弘前人也。庚子又八月<sup>4</sup>、革命軍起惠州。君挺身赴義、遂戦死。嗚呼、其人道之犠牲、興亜之先覚也。身雖殞滅、而志不朽矣。民国二年二月廿七日 孫文謹撰並書

〔山田良政君ハ弘前ノ人ナリ。庚子又八月、革命軍惠州ニ起ツ。君挺身義ニ赴キ、遂ニ戦死ス。嗚呼、其ノ人道ノ犠牲、興亜ノ先覚ナリ。身ハ殞滅スルトイエドモ、志ハ朽チズ〕

(4) 「山田良政」(『改元記念 東奥人名録』青森交詢社出版部、1913年11月20日)

自ら敵の陣に赴きて戦ひ死す<sup>5</sup>

(5) 宮崎滔天「宮崎滔天氏之談」(1916年5月18日以降)

行衛不明<sup>6</sup>。

上記5編のなかで、(2) 宮崎のものは「多分戦死したのであらう」と述べているものの、かれが把握した事実としては「行方不明」だけでしかない。(3) 孫文のものは「戦死」と記しているのだが、この時期に良政死亡を確認できた形跡はなく、

やはり宮崎の推測と同類のものとおもわれる。

(4) 『改元記念 東奥人名録』も戦死としているが、死亡を確認する新資料にもとづくものではなく、(3) 孫文の碑文を参考にしたとおもわれる。(4) 『改元記念 東奥人名録』に先行する(1) 宮崎から(3) 孫文のうち、(1) 宮崎は刊行当時はベストセラーであったと伝えられるが、(4) 『改元記念 東奥人名録』編纂時点ではすでに入手困難なものであったし、(2) 宮崎は一新聞記事であるから、現在ほど資料整理がすすんでいなかった当時、発行後時間が経過した新聞を用いることは容易ではなかったはずである。仮にそれらすべて参考にしていたとしても、武装蜂起に参加した末に長きに渡って消息不明であるという客観的事実から「戦死」と推測して記したのであらう。

#### B. 洪兆麟証言以後

1918年山田良政の最期があきらかになったとされる。かつて清軍の軍人として惠州事件を鎮圧した際、良政らしき人物をみたかもしれないという人物があらわれたのである。

(6) 宮崎滔天「亡幽録／山田良政」(『上海日々新聞』、1919年～1920年)

越えて昨年(1918年)の春、彼の令弟純三郎君は、事を以て広東に遊び、計らずも南軍の将某君(失名)に面会した。然るに將軍は見る顔色を變じ、彼の手を握つて涙に咽びながら、「君は山田良助〔政〕の兄弟ではないか、姓も同じで顔も似てゐる」と云ふ。〔中略〕

「私〔南軍の将某〕は其時官軍であつた。併し私は令兄を殺さぬ。殺さぬけれども、私が殺したと言つて宜しい。私は決して其責任を避けません。実は両軍は互に諒解する所があつたので、義軍を追撃しなかつた。然るに義軍が予定の総退却を始むるや、六人の兵士が踏み止まつて無闇に我等に向つて発射する。退却せよとの合図をしても頑強に反抗する。仍て已むを得ず捕へ

て之を殺さしめたのであるが、其内に金縁の眼鏡を懸けた立派な人で、大金を懐中してゐる人があつた。必定日本人に相違ない。若しこれが日本に判つたら大変だと云ふので、死体は是と一緒に埋づめ、所持せる立派なピストルと眼鏡は、之を川に投じ、厳令を發して、極端に秘密にした。と云うのは、日本との国際交渉を恐れたからである。今にして思へば、その人が君の令兄であつたのだ」<sup>7</sup>

宮崎は良政とつながりがある。また良政の故郷青森での追悼式典に純三郎より直接招待をうけており、純三郎とも連絡があることなどから、ここでの内容は純三郎本人あるいはそれに近いところより知つたと考えられる。

ここで清軍と革命側双方に「諒解する所があつた」というのは真実味を感じさせる行である。当時、広東には新建陸軍のような中央政府肝いりの近代編制の軍隊は配されておらず、革命側にしても蜂起時の600名が数日の間に農民の参加もあつて2万ともいわれる数にふくれあがつたといわれるような雑多な集まりでしかなかった<sup>8</sup>。つまり双方ともに自己や所属する集団の主義主張のために戦い抜く組織ではなかつたのである。よく知られているように、惠州事件で革命側は蜂起後に期待していた日本からの援助がうけられないことが判明し頓挫したのであり、その時点で革命側はもちろん、鎮圧する側もことさら犠牲をだすような戦闘を継続する必要はなくなつたといえる。そう考えると、「諒解する所があつた」というような妥協がなされることはきわめて現実的なのである。

また、「金縁眼鏡」、「大金」、「立派なピストル」という所持品があげられるなど、先行する良政伝よりも具体的な様子が記されており、さらに日本人だということで殺害事実が意図的に隠されたのだと説明されている。

しかし、この宮崎の文章が発表されたのは「上

海日日新聞』という上海で発行されていた日本語新聞であり、戦後の『宮崎滔天全集』が公刊されるまで、この内容は広く一般に知られるものではなかつたと考えられる。

(7) 孫文「山田良政頌徳碑」(青森県弘前市 貞昌寺、1919年9月29日)

山田良政先生弘前人也。庚子閏八月、革命軍起惠州。君挺身赴義、遂戦死。嗚呼、其人道之犠牲、興亜之先覚也。身雖殞滅、而志不朽矣。

民国八年九月廿九日

[山田良政先生ハ弘前ノ人ナリ。庚子閏八月、革命軍惠州ニ起ツ。君挺身義ニ赴キ、遂ニ戦死ス。嗚呼、其ノ人道ノ犠牲、興亜ノ先覚ナリ。身ハ殞滅スルトイエドモ、志ハ朽チズ 民国八年九月廿九日]

(8) 孫文「山田良政君建碑紀念詞」(1919年)<sup>9</sup>

而君以失路為清兵所捕、遂遇害。

[訳：山田良政は道に迷い清兵に捕らわれ、ついに殺害された]

上記の2つは、1918年に良政が死亡したとされた後の孫文のもので、(7)孫文の碑文は(3)孫文のものとはほぼ同じものである。(8)孫文では、純三郎あるいは件の元清軍人であつた人物から聞き知つたのだろうか、良政が道に迷い清兵に捕殺されたと前掲碑文での「戦死」以上の事情を記している。しかし、これは同時期に純三郎から元清軍人の告白をきいた(6)宮崎の抵抗しつづけた末に捕縛されたというものとは異なっている。

(9) 村松梢風<sup>10</sup>「中国革命夜話」(『中央公論』第45年第12号第515号、1930年12月)

山田良政は、一方の兵を指揮して戦ひ且つ逃れて来た。そして惠州府城の東三十六支里なる三多祝といふ処まで来ると敵の軍に遮られた。革命軍は奮戦したけれども衆寡敵し難く、多く

は散り<sup>〜</sup>に潰走した。最後に山田の身辺に残つてゐた者は三合会の荒武者五名に過ぎなかつた。彼等は小さな丘を死守して奮戦した。山田は支那服を身軽に着て、其の上から繩の帯を締め、日本刀を揮つて戦つたが、力尽きて捕へられ、同志の五人も捕へられて、その場で処刑された。

[中略]

彼は基督教を信じ、上海へ来た当時、在留邦人青年を集めて、基督教青年会を組織したこともあつて、青年の間に信望が厚かつた。

[中略]

民国六年の十月、純三郎は所用あつて広東へ行つた。彼は広東で、国民軍第二路司令洪兆麟と或る処で会つた。

洪兆麟は、生粋の軍人であるけれども、頭を剃り、僧衣を着て、いつでも念珠をつまぐつてゐた。

[中略]

山田良政が戦死した場所は、久しい間不明であつた。革命軍の退却に際して、山田は道に迷つて一同と離れ<sup>〜</sup>になり、途中で官兵に捕へられて殺されたのであらうといふ推測だけで歲月が経つてゐた。

[中略]

彼「洪兆麟」は、小丘に拠つて最期迄抵抗した六名の革命黨員を捕へて其の場で銃殺したが、其の中の一人は日本人だつた。そして彼等の死骸は其の丘に埋めた。然るに、其の日本人は捕へられたとき香港紙幣二千弗を懐中してゐた。洪兆麟の方では、それは日本の宣教師だらうと推測した。宣教師とすれば、外交上の重大交渉を惹き起すに相違ないといふ恐れがあるので、其の事を全く秘密に付して、今日迄過ぎてしまつたのであつた。

[中略]

山田良政の最期は初めて明かになつた。純三郎は大いに喜んでどうか兄の遺骨を受け取り度

いと、云々と孫逸仙は朱執信を三多祝に派遣し、別に洪兆麟の副官蔡標を同行させ、其の地で良政の霊を鎮める祭りを営ませた上、遺骨を持ち帰るやうに命じたが、何分六名が一緒に埋葬されたことゝて白骨は見別けが付く道理もなく、そこで骨の代わりに小丘の土塊を持ち帰つた。純三郎は広東で其の土を受け取つて日本へ持ち帰り、大正七年に郷里弘前の菩提寺に埋葬して墓碑を立てた。

[中略]

惠州の鎮守使李福林は、良政のために三多祝の小丘に記念碑を建て、其の年の秋除幕式を挙げた。<sup>11</sup>

ここで村松は、(8) 孫文が伝える道に迷い捕殺されたというのは推測にすぎないとし、大筋は(6) 宮崎に似る。最後まで抵抗をつづけた末に捕殺された6人のうちの1人が良政であつたというのは(6) 宮崎と同じであり、戦前の良政伝で清軍に捕えられた人数を6名と数字をあげて記しているのはこの(9) 村松と(6) 宮崎のみである。

(6) 宮崎との相違点は、まず洪兆麟証言を宮崎の1918年ではなく1917年10月としている点がある。ほかには、宮崎が失念したとしていた「南軍の某将」について、それは洪兆麟(原文「洪兆麟」は誤植であろう)であると明記している点、宮崎が所持品にあげる「大金」については「香港紙幣二千弗」と金額まで記す点、宮崎があげていた「金縁の眼鏡」、「立派なピストル」が登場しない点がある。さらに、遭難時の良政について「支那服を身軽に着て、其の上から繩の帯を締め、日本刀を揮つて戦つた」ときわめて具体的に格好様子を述べているが、これは先行する良政伝にはまったくない描写である。ほかにも「洪兆麟の副官蔡標」<sup>12</sup>、「惠州の鎮守使李福林」<sup>13</sup>、引用箇所以外では「兩広総督陶模」<sup>14</sup>と詳細に記していることからすると、前掲の(1) 宮崎から(8) 孫文のもの以外の資料を参考にしたとおもわれる。

## (10) 東亜同文会編『対支回顧録』下巻(1936年4月)

同志数人と共に一去不還の途に上つた。十月二十日の晨、無事惠州に入り、三多祝の革命軍に投じ、孫文の密命を鄭指揮に致し、同時に鄭を扶けて未解散の革命軍を率ゐて三州田の大本営に退き、後図を計らしめんと欲し、同月二十二日、三多祝に於て清軍と交戦し、竟に敵弾の殲す所と為つた。享年三十三。

味方敗軍の爲め、潰乱の状に陥り、其遺骸をも得ること能はず。激戦悲壯の状見るが如しだ。

[中略]

大正二年孫文重ねて我国に来たりし時、君の遺烈を追懐し、東京谷中全生庵に『山田良政之碑』を建立した。同七年夏、幕客朱執信を惠州に特選し、君が陣没の地に就き遺骨を求めさせたが、白雲荒村寒畑黄土、またたづぬべからず。不得已四辺の土を記念として持ち帰つた。<sup>15</sup>

良政が戦死したことをうかがわせる記述はあるものの描写は(8)宮崎や(9)村松のように具体的ではない。(9)村松と同じく朱執信が三多祝へ派遣されたとしているものの、なぜかその原因となった洪兆麟証言についてはまったく触れていない。

## (11) 葛生能久『東亜先覚志士伝記』下巻(黒龍会出版部、1936年10月)

[良政は]東京昆布会社に入社して明治二十三年上海支店詰となりて渡支、支那人沈文藻に就きて支那語を研究し、業余上海日本青年会等の爲めに尽力し衆の深く敬重する所となつた。[中略]良政は奮戦力闘大に革命軍の士気を鼓舞する所あつたが、戦ひ利あらずして革命軍敗れ、良政も亦た戦歿するに至つた。[中略]大正二年來朝の際には東京谷中全生菴に記念碑を建立し、又た戴伝賢をして左の如き諫詞を作らしめて英霊を慰めた。

中華民國紀元前十二年九月惠州革命軍起、日

本義士山田良政与洪兆麟戦死焉。六年乃弟純三郎因護法軍洪統領兆麟得骸骨帰、八年九月窆。[中略]次で大正七年孫文は朱執信等を三多祝に派遣し、良政の遺骸を搜索せしめしも発見せず同所の黄土一塊を採り来つて記念となし<sup>16</sup>

(9)村松は、良政が上海でキリスト教青年会を組織していたと述べていたが、この葛生も「上海日本青年会」とキリスト教とは明示していないものの、それらしき団体での活動を記す。

良政の最期については(10)『対支回顧録』と同じく具体的な描写はないが、文中に引用された戴伝賢の諫詞さいしのなかで(9)村松が明記した良政死亡の確認の根拠となる人物「洪兆麟」の名がみえる。そこでは、「六年乃弟純三郎因護法軍洪統領兆麟得骸骨帰、八年九月窆。(訳：1917年弟純三郎は洪兆麟によって良政の遺骨を持ち帰ることができ、1919年9月埋葬した。)」とあり、(9)村松と同じく純三郎と洪兆麟が会った時期を1917年としている。

(12) 米内山庸夫<sup>17</sup>「広東風土記(一)」(『支那』第30巻第1号、東亜同文会、1939年1月)

明治三十三年九月、日本人山田良政が惠州で殺された。戦死したとも云はれるし、捕へられて銃殺されたとも伝へられる。私は戦死したと思ふ。

[中略]

這般の事情[日本の軍事援助がえられなくなったこと]を伝える使命を帯びて大陸に渡つたのが山田良政である。そうして惠州三多祝で革命軍は敗れてちりぢりとなり、その時、山田良[政]は行方不明となった。

[中略]

陳炯明の乾兒<sup>18</sup>で、革命当時、民党の闘士として相当鳴らした洪兆麟と云ふ男がある。民国七八年の頃、惠州軍務督弁をやつてゐて、私も数回広東でこの男に会ふたことがある。湖南生

まれだと云ふてゐたが、あまり物言はない何処か線の太い親分肌の男であつた。この男が惠州革命当時清軍側にて、三多祝で革命党を六人捕へて銃殺したと云ふ。その一人が山田良政らしいと云ふのである。さうかも知れないが、何れにせよ、その当時、已に二十年余りも前の朧ろげな記憶から云ふのであり、たゞその男が云ふだけで、はつきり確かめることは出来ない。

[中略]

惠州革命に関する記録として「清粵督德寿奏報惠州革命起事摺」<sup>19</sup>と云ふものがある。ときの両広総督德寿が北京朝廷に上奏した報告書である。その中にかう云ふ文句がある。

「……乗勝克三多祝黄沙洋西処、査驗斬匪屍、内有一具係服外洋衣袴、詢之生擒各匪、均指為偽軍師鄭士良、未知是否確實、此閏八月廿七日勦弁帰善会匪獲勝之实在情形也」

即ち、三多祝、黄沙洋二ヶ所に於て斬殺したものの、中に、一人洋服を着たものがある。これを生擒りにしたものに聞くと、それは鄭士良だと云ふ。しかし、ほんとうか何うか分からないと云ふのである。

その頃、支那人は、文武官民共、辮髪を下げ支那服を着るを常とし、ざん切り頭で洋服を着るものは極めて稀であつた。だから、その革命党の死屍の中の外洋衣袴の、即ち洋服を着たものが特に目立つたのである。

[中略]

私は、その洋服の死骸は山田良政だと思ふ。奏摺にも何人かと云うことは曖昧にしてゐるが、或は、日本人と知りつゝ、殊更にそうしたのではないかとも思はれる。<sup>20</sup>

米内山は、まず洪兆麟の証言が明確な裏付けがなされていないことを指摘する。その上で清朝の公式文書奏摺<sup>21</sup>にもとづき、鄭士良と目された洋装の人物が良政であろうと推測しているのだが、これは洋服の人物は鄭士良だとした捕虜の証

言と矛盾している。米内山は、事件以前に鄭と会つたことがある宮崎が、亡命した鄭の辮髪を切つた洋服姿に驚いていることから、事件当時の鄭は辮髪姿であつたのが亡命するために切つたのだとする。しかし、この事件で革命側が清軍の捕虜に対して「皆辮髪を剪去りて軍役の用となす」<sup>22</sup>としていたことや、かれが関係する三合会のような秘密結社には滅満興漢など民族主義的傾向があつたことを考えると、蜂起時に切つていた可能性もあるだろう。さらに、良政遭難の直前10月16日、福州領事豊島捨松が外務大臣青木周蔵へ送つた報告には「山田良政ナル者ハ支那服ヲ着シ向ニ」<sup>23</sup>とあり、すくなくとも鄭士良と接触する直前は洋装ではなく中国人の身なりをしていたとおもわれる。

このように米内山のものも、かれ自身が疑念を逞した洪兆麟証言同様に「はつきり確かめることは出来ない」ものだといえる。ただ、根拠とした奏摺には、革命側に勝利した時期を「閏八月廿七日」すなわち1900年10月20日と記されていることから、件の洋服の人物が良政だとすれば、結束博治などが伝える10月22日よりもかれの死ははやいことになる。

この米内山の良政伝の特徴は、先行するものと異なり洪兆麟証言を全面的にとることなく、その問題点を指摘しているところである。しかし、この文章が発表されたのは東亜同文会機関誌『支那』という特殊な性格で部数も少ない雑誌であつたから、有力誌『中央公論』掲載の(9)村松とくらべればきわめて限定された読者しかもつていなかった<sup>24</sup>。

(13) 平山周「山田良政君伝」(『中華民国革命秘笈』、皇国青年教育協会、1941年2月5日)

十月二十二日、海陸二途に分れ、まさに大鵬に返らんとす。敵軍その情を知り、これおを三多祝に要撃す。全軍ために土崩瓦解し、しかして君ついに乱軍の中に戦死す。<sup>25</sup>

- (14) 佐藤慎一郎「孫文と山田良政」(『大亜細亜』第9巻第10号、大亜細亜社、1941年)

意を決して三多祝に踏み止まり、遂にその地に於て壮絶な最後を遂げたのである。<sup>26</sup>

叔父の死後二十年(民国七年)にして始めてその死の全貌が明かにされたのである。<sup>27</sup>

- (15) 水野梅暁<sup>28</sup>「興亜先覚の群像 中国革命追念碑の建立」(『興亜』12月号、大日本興亜同盟、1941年) 平山前掲文を引用しつつ次のように述べている。

而してこの惠州の役に進んで参加して鄭士良と事を共にしたるは、即ち山田純三郎の実兄山田良政その人であつたが、不幸にして清軍の為に破られて戦死したのですが、支那の革命に殉じたる邦人最初の犠牲者であつた。<sup>29</sup>

これら(13)平山から(15)水野は、山田良政が三多祝で死亡したと簡潔につたえるのみで、詳細な記述はない。当時、事件にかかわっていた平山は、良政死亡の日時を10月22日と明記する。水野は、この(13)平山をそのまま引用しており内容に違いはない。

以上が戦前のものであるが、(9)村松のものだけがキリスト教との関係をはっきりと述べており特徴的である。さらに、村松は、中国服を縄帯で締めて日本刀を振るうという姿を描いているのだが、出典が不明であることと日本刀を揮う風体と宣教師とみなされたという記述はしっかりとしない。このほかにも洪兆麟について「生粋の軍人であるけれども、頭を剃り、僧衣を着て、いつでも念珠をつまぐつてゐた」<sup>30</sup>としているが、かれに実際に会ったことのある米内山がそのようなことはまったく記しておらず疑問が残る。(9)村松は詳細かつあたらしい山田良政像を提示するものであるが、以上のような点からどこまでが資料に基

づくものであるのかが問題である。

### 3. 戦後の良政伝

- (16) 大鹿卓「肖像画」『梅華一両枝 中国遊記』(洗心書院、1948年12月5日)

[洪兆麟が語るに] いよ〜革命軍が敗退といふとき、主だつた幹部のものは再挙を期して玉砕を避けることにした。貴方の令兄らしい人もそのうちにゐたが、その人はどういう決意があつたのか、頑として逃亡を肯んじなかつた。そのため不幸にして敵手に斃られたのだが、無論私も逃亡の組で、現場に居合はせたわけでないから正確な模様は知らない。なんでも場所は惠州城外三多祝の村外れで、死骸は穴を掘つて埋められたといふことだが、泥棒みたいな土匪の連中といつしよくたゞから、今ではどうなつてゐるか、甚だこゝろもない。あのとき令兄は確かメリヤスのシャツを着て、眼鏡をかけてをられた。山田さん、ちよと眼鏡をかけて下さい]そこで純三郎先生が、いはれるまゝに眼鏡を借りてかけると「うん、そつくりだ。確かにあの人が山田先生だつた」<sup>31</sup>

文中、純三郎に取材したことが述べられているが、「あの当時鄭子良の配下だつた洪兆麟といふ人物」<sup>32</sup>というあきらかな間違いがある。もちろん、正しくは鄭は革命側の幹部であり、洪は当時清側軍人で革命に加わったのは辛亥革命からである<sup>33</sup>。大鹿は「[[日中]両国いづれのものも『三十三年の夢』に拠つてゐると思はれるものばかり」<sup>34</sup>と述べているものの、すでに洪について述べている村松や米内山のものにあたっていないようである。

良政の格好、所持品について「メリヤスのシャツ」と「眼鏡」があげられているが、「眼鏡」は(6)宮崎で「金縁の眼鏡」としてあげていたものの、その後は記されていないものである。(6)宮崎はこの文章から30年近くも前の上海で発行されて

いた新聞に掲載されたにすぎず、大鹿が参考にすることができたのかは疑問である。また、洪兆麟の名前自体は伏せられているものの(6)宮崎では、その所属が明記されており、実見しているのならば清朝と革命側を取り違えるはずはない。では、大鹿はどこから「眼鏡」をとってきたのだろうか。文中、大鹿は純三郎を上海の自宅にたずねた際のことを次のように述べている。

壁間の肖像画に改めて見入った。実はこの部屋に入つた瞬間から、かの令兄の肖像であらうかと気付いてゐたからである。遠くから引きのばした写真のように見えたが、近寄つてみるとそれは鉛筆画で、清朝時代の支那帽に支那服といふ装ひであるが、白晳の輪郭といひ、瞳の据りといひ、私達日本人には一瞥して疑ひもなく日本人とわかる風貌である。<sup>35</sup>

この肖像画ではないが、「眼鏡」をかけ中国人の装いをした良政の写真は有名である。件の肖像画も同じようなものだったのかもしれない。そうだとすれば、大鹿は良政の「眼鏡」を見知っていたことになる。そして、それは鉛筆画であるから眼鏡の「色」はわからない。大鹿は(6)宮崎によって「眼鏡」を知つたのではなく、もっぱら純三郎を自宅に訪ねた取材にもとづいて著したのであろう。また、それまで伝えられてこなかった「メリヤスのシャツ」という新しい所持品、前掲した洪兆麟を鄭士良の部下とするような誤りをおかしていることもふくめ、純三郎の記憶違いや大鹿の聞き違いなどによってでてきたのかもしれない。純三郎は東亜同文会関係者でもあったから前掲の良政らしき人物が洋服を着ていたと伝えた米内山の文章が掲載された『支那』をみており、この「洋服」が誤って「メリヤスのシャツ」にかわつたのかもしれない。

しかし、この「メリヤス」のシャツと「眼鏡」は、その後の良政伝に度々登場、定着していくことに

なる。

(17)石川順「惠州起義に尊い血を流す 山田良政・山田純三郎」(『砂漠に咲く花』、私家版、1960年5月20日)

山田良政は、この一戦で戦死したということになつてはいるが、事實は逮捕せられ、惠州の三多祝で斬に処せられたことが明らかになつてはいる。この日が九月二十九日、革命同志のためにかれは尊い血を流したのである。

[中略]

大正七年(一九一八年)春、良政の弟山田純三郎が孫文と、もに広東に滞在中、洪兆麟という湖南出身の一師長と会談した。洪はもと清朝時代軍隊にあつて、惠州事件のころ、惠州にいたことがあるので、鄭子良らの処刑についてきいたところ、「自分の部下がその処刑を実行した」という。それなら、その中に日本人のいたのを記憶しているのかといつたら、「日本人といつて名乗つたものは一人もいなかったが、眼鏡をかけ、メリヤスのシャツをきたものがいた。恐らくはそれが日本人であつたかも知れない」という。すると「孫文は自分の眼鏡をはずして山田にかけさせ、「どうだ。その人はこの男と似ているか」と訊ねたが、それまでの記憶はないらしく、どうもそれまではわからないと答えた。<sup>36</sup>

これも(16)大鹿とほとんど同じ内容であるが、(7)孫文の碑文の日付「民国八年九月二十九日」と混同したのだろうか、良政が殺害されたのが9月29日であるとしている。惠州事件は1900年10月初旬にはじまったとされており、この日付ではあわない。かりに旧暦と取り違えているとしても、光緒26年9月29日(1900年11月20日)となり、さきにあげた惠州事件についてのものとおもわれる1900年11月5日付奏摺とあわない。さらに、鄭士良が処刑されたような記述がみえる

が、鄭は惠州事件の翌年急死しており、これも事実と異なる。

また、(6) 宮崎、(9) 村松、(16) 大鹿では、洪兆麟は良政と純三郎の顔が似ているといていたが、ここでは兄弟が似ているかについて「わからない」とこたえており、良政死亡の根拠となるはずの洪の証言が弱々しいものとなっている。

(18) 都築七郎「惠州の塩 孫文革命に一身を捧げた山田良政の熱血生涯」(『日本及日本人』、日本及日本人社、1973年9月1日)

べつに日本人だと名乗ったわけではありませんので確証はないのですが、このおとこは、珍しいことにメリヤスのシャツを着て、眼鏡をかけていたのを、いま思い出しました。あるいは、その捕虜が日本人だったかも知れません。<sup>37</sup>

このように(16)～(17)では、「メリヤス」のシャツと眼鏡が良政の特徴としてあげられ、すっかり良政を示すものになっているかのようである。しかし、前述したように「メリヤス」は戦後の(16)大鹿においてはじめて登場したものであり、良政の死亡が確認できたという話が出た直後、そのことをおそらくは純三郎より知った(6)宮崎があげる「眼鏡」と同じように信憑性があるものとすることはできない。

(19) 佐藤慎一郎「中国革命と山田良政 人生意気に感ず、功名誰か復た論ぜん」(『師と友』第33巻第6号、全国師友会、1981年)

かつて北京での同居者が、良政について「支那語に精通し、辮髪を垂れて、支那服を着け、宛然たる支那人であった」と記録している。良政が斬に処された時も、支那服を着用、金ぶちの目鏡をかけ、わら帯をしめていたという。しかし、どうしても、日本人らしかった。当時中国では、外国人にたいしては、絶対に手を触れてはならぬという厳命が下っていた。釈放すべ

く、何回も、「お前は、日本人であろう」と念を押したが、淡々として「中国人だ」と答え、従容として斬に処されたという。<sup>38</sup>

この佐藤が先行するものと大きく異なっている点は、良政は日本人であるか否かを問われたのに対して「中国人である」と答えていることである。これは、保坂正康が次のように紹介しているように、純三郎の口述からでたものと思われる。

純三郎の三男順造が、私に述懐している。

「伯父が政府軍の尋問に何ひとつ答えなかったこと、それが父の誇りでしたね。良政とて、革命の内容についてはくわしくは知っていたと思うけど、それを語らなかった。それこそ日本人志士とっていいのではないかと思う」<sup>39</sup>

また、ここでは戦後の(16)大鹿以降にでてくる「メリヤス」が記されておらず、その良政像は眼鏡の有無をのぞけば戦前の(9)村松の中国服に縄帯を締めた姿と同じである。

また、(16)大鹿以降、「眼鏡」としか登場しなかったものが「金ぶち眼鏡」となっている。この所持品自体は、すでに(6)宮崎が紹介しているのであるが、さきに述べたように宮崎の文章は『上海日日新聞』紙上という限られた読者しかふれることができなかつたもので、1971年『宮崎滔天全集』に収録され公刊された後ひろく知られるようになったものである。したがって、佐藤の「金ぶち眼鏡」もこの全集に拠ったのであろう。

(20) 相沢文蔵「津軽の近代化とキリスト教 信仰と革命に殉じる 日中提携の山田兄弟」(『陸奥新報』1986年6月7日)

良政は三十三年九月、孫文の第二回挙兵のさい手違いがあり、部下とともに清軍にとらえられ処刑される。支那服をまとっていたもの、金ぶち眼鏡にたん正な風ぼうは日本人宣教師を思

わせるものがあつたが、日本人たることは明かさなかつた。<sup>40</sup>

「宣教師」とみなされたというのは(9)村松の特徴であり、それを参考にしていただくとおもわれる「支那服」、「金ぶち眼鏡」、「日本人たることは明かさなかつた」の行は(19)佐藤に似る。

(21) 上村希美雄『宮崎兄弟伝 アジア編(上)』(葦書房、1987年6月20日)<sup>41</sup>。

彼[良政]の戦死が確認されたのは大正七年、実にそれから十八年後のことである。革命軍の撤退を見た官軍は、惠州東方四十支里の三多祝でこれを襲つた。その時殿軍となり最後まで応戦して倒れた六名のなかに、中国服を着、荒縄を腰に巻いた一人の日本人がいたという。指揮官洪兆麟は遺品の金縁眼鏡や千ドルという大金から、山田を日本人の宣教師か何かであろうと思ひ、国際問題になることを恐れて、屍体を埋葬したあと嚴重な箴口令を布いていた。

(9) 村松の「惠州府城の東三十六支里なる三多祝」が「惠州東方四十支里の三多祝」、同様に「香港紙幣二千弗」が「千ドルという大金」と多少の違いはあるものの、ほぼ同じ内容となっている。また、「宣教師」とみなされた点も村松のものと同じであり、それにもとづいたのであろう。

村松の文中にない「金縁眼鏡」については、前掲の『宮崎滔天全集』刊行によって知られるようになった(6)宮崎にもとづいていただくとおもわれる。

(22) 原子昭三『津軽奇人伝説』(青森県教育振興会、1987年12月1日)

洪兆麟は[良政たち]六名の死体を一緒にして小丘の一隅に埋葬した。[良政]氏は戦死したとき軍用金として香港紙幣一千ドルを懐中していた。洪の方では、当時良政は日本の宣教師であろうと推測し、宣教師とすれば、外交上の

重大なる問題になるに違いないとの判断から、その時に至まで、良政の命を絶つたことは秘密にしていた。<sup>42</sup>

これは(9)村松にもとづくものとおもわれる。前掲村松の「彼[洪兆麟]は、小丘に拠つて最期迄抵抗した六名の革命黨員を捕へて其の場で銃殺したが」以下の行と言ひ回しまでよく似る。異なっているのは、所持金の額が「一千」か「二千」なのかという点のみである<sup>43</sup>。

なお、この文章は著者が青森県教育振興会機関誌「青教あしかび」に連載していたものであり、初出は単行本刊行の1987年より前である。

(23) 保坂正康『仁あり義あり、心は天下にあり』(朝日ソノラマ、1992年2月10日)

[洪兆麟]「あのときは、清朝政府軍の守備隊長をしていましたよ。私の部下が革命軍の幹部の処刑を行いました」[中略]「あのときの幹部のなかに日本人だと名のるものはいなかつたと思う。しかし、日本人のような人物はいた。というのは、その男はどのような質問をしても、決して口を開かなかつたのです。それに金縁の眼鏡をかけ、メリヤスのシャツを着ていました。中国人とは異なる雰囲気をもっていましたし……。日本人がいたとすれば、たぶんその男でしょう」

孫文は、自分の眼鏡を外し、純三郎にかけさせた。

「その男は、この人物に似ていないか」

洪はしばらく純三郎の顔を見つめていた。しかし、思いだせない。首を振って、「わからない。そこまではわからない」と答えた。<sup>44</sup>

質問をしても答えなかつたという点は(17)佐藤と、「メリヤスのシャツ」ならびに洪兆麟が良政と純三郎が似ているのかどうかわからないとこたえる点は(15)石川と同じである。

(24) 結束博治『醇なる日本人 孫文革命と山田良政・純三郎』(プレジデント社、1992年9月6日)は、(6) 宮崎を引用しつつ、次の山田純三郎の手記を紹介している。

大正七年(一九一八年)、孫文が広東に臨時政府を組織した時、一同で会食したことがあった。孫文が同席していた洪[兆麟]師団長に「この人は山田純三郎といい、吾々の同志山田良政君の弟だ」と僕を紹介した。洪はびっくりしたように僕の顔を見つめていたが、ちょっと眼鏡をかけてくれというので隣の人の眼鏡をかけると、「よく似ている。実は私はその頃、清軍の軍曹で三多祝で革命軍と戦った。貴君の兄を殺したのは私である。どうか存分にして下さい」といった。(山田純三郎『革命夜話』)<sup>45</sup>

これは、純三郎から洪兆麟に関する事柄を直接聞いたとおもわれる(6) 宮崎と(16) 大鹿と同じ内容となっており、かれら二人は純三郎が述べている内容をほぼそのまま著したものであることを示している。

(25) 田中健之「日本の中の近代アジア史 中華革命に殉じた日本人山田良政」(『中央公論』第122年第6号第1478号、2007年6月)

殿として日本刀を揮って戦う山田良政は、金縁眼鏡をかけ、辮髪を垂らして中華服を纏ったその上から、縄の帯を締めていた。

力尽きて清国官兵に捕えられた山田は中国語を能くしたものの、どうみても日本人らしかった。当時、清国では、外国人に対して手を触れてはならないと厳命されていた。国際問題になることを恐れた清国官兵は、山田にどうしても日本人であるということを自白させるべく責め立てた。しかし、どんなに厳しく責められても、日本人であると、彼は頑として最後まで口にしなかった。ただ淡々として「中国人だ」と答

えるのみ。結局、山田良政は、中国人同志とともに荒縄を巻かれたまま中国人として処刑された。

[中略]

山田良政が、中華革命に殉じてから一三年後の大正二(一九一三)年、孫文と山田純三郎は広東に滞在していた。このとき、孫文は、偶然に洪兆麟と名乗る軍人と言葉を交わす機会をもった。惠州起義の際に清国政府軍の守備隊長をしていた彼の部下が、革命軍幹部の処刑を行ったということを知った孫文は、その中に日本人の有無を尋ねたところ、「その幹部の中には、日本人だと名乗る者はいなかったと思うが、日本人のような人物はいた。その男は何を質問しても一切口を開かず、金縁眼鏡にメリヤスのシャツを着た人物がいた。彼は中国人とは違う雰囲気を持っていた。日本人だとすれば、多分その人だろう」。<sup>46</sup>

引用前半部は、(19) 佐藤と同じ内容だが、「日本刀」という(9) 村松のみがあげる所持品が記されていることから、これも参考にしたとおもわれる。引用後半部は、(23) 保坂に似る。しかし、洪兆麟証言を1913年としているのは誤りであろう。なぜならば、洪兆麟証言によって良政死亡が確認されたとし、1918年7月上海での追悼会、同9月弘前貞昌寺での葬儀、翌1919年10月弘前貞昌寺での山田良政建碑式が行われたのである。証言が1913年とすれば、葬儀までにあまりに期間が空くことになる。1913年には東京全生庵での良政建碑式が行われていることから、これと1918年～1919年の事柄を取り違えたのであろう。

#### 4. 資料上確認できる良政の最期について

上記のようにさまざまな良政の最期がどのように伝えられてきたのかを時系列にならべながら

いくと、伝えられている内容の中で事実確認できる事柄がほとんどないことがあきらかとなる。

惠州事件での良政遭難について、資料の上から確認することができるのは、わずかに下記の事柄だけである。

良政が、台湾から大陸へ渡ったことについては、10月9日のものとおもわれる次の外務省文書によって確認できる。

孫ノ一派中山田レウセイ [良政]、ソウセウチ、コウヘキカイ、チンセキナン、コウエンナン、及ヒ九月二十八日□広東ヨリ渡台シタル茨城県人玉水ツネジ [玉水常治] ナル者本日午前淡水発ノ舞鶴丸ニテ香港ニ向ケ出発ス<sup>47</sup>

さらに次にあげる2部の外務省文書によって10月10日廈門に上陸したことが確認できる。

(在廈門土井陸軍大尉発寺内正毅参謀本部次長宛 10月10日付け電信)

南京同文所員山田ヨシマサ [良政]、平山シウ [周] 外五六名清国人孫逸仙ト汕洞 [汕頭] ノ北潮州ニ暴挙ヲ企テ居レリ山田ハ数日 [本日?] 台湾ヨリ当地ヲ経テ汕洞 [汕頭] ニ向ヒ<sup>48</sup>

(廈門上野領事発青木周蔵外務大臣宛 10月12日付け電信)

十月二日附貴電信ニ関シ山田良政出水茂雄及び森岡竹之助ハ三名ノ清国人ト共ニ本月十日台湾ヨリ着港香港ヘ向ケ出発セリ其ノ行先地ハ広東ナルヘシト云フ<sup>49</sup>

そして良政の消息が途絶えたことを伝えるものは、寺内正毅陸軍参謀本部次長発内田康哉外務省総務長官宛 11月2日提出文書にふくまれる「在廈門土井大尉報告」である。

孫逸仙一派ノ日本人 本月 [10月] 九日香港

方面ヘ向ヒタル山田良政ノ消息ニ付テハ未タ得ル処ナシ当地残留ノ尾崎外三名ハ其後在台北平山周等ト両三回所信ノ往復ヲ為シ常ニ香港方面ニ於ケル山田ノ消息ヲ待チ居レリ本月十五日午前十時台湾淡水ヨリ入厦ノ淡水丸ニ拠リ東本願寺漳州布教所主任僧高松誓 (去ル八月廿四日東本願寺厦門布教所火災ト関係アルモノ) 台北ヨリ帰厦シ直ニ尾崎外三名ノモノト会合セリ<sup>50</sup>

この文書中には「昨廿二日」という記述があり、この文書が10月23日に作成されたものであることが知れる。これが良政の消息不明を伝えた最初のものである。

以上が、資料上確認できる良政の最期であり、これ以外のものはすべて不確かな伝聞でしかない。良政死亡の根拠とされる洪兆麟証言にしても<sup>51</sup>、結局のところは(12)米内山が述べているように事実として確認できる類のものではないし、その米内山がとりあげた清の公式文書にある洋服を着た人物にしても、やはりそれが良政であったことを証すものはない。

## 5. 良政伝がもつ意味

山田良政の最期についての記述の比較から浮かび上がってくるのは、さまざまな良政伝であげられている事柄に多く不確かなものがふくまれていることである。この問題はすでに認識されており、島田慶次・近藤秀樹校注『三十三年の夢』では、山田良政について「戦死(正確には行方不明)」<sup>52</sup>との注が付されている。しかし、一方ではみてきたようなさまざまな事柄が付加されながら良政は語られてきたのである。そこには著者たちの意図の有無はもちろん、それをこえる意味があるのではないだろうか。とくに戦前のものに関しては発表された時期に注目すると、その意味の一端があきらかになると考える。

1930年の(9)村松について。これ以前の良政伝で確認できたものは洪兆麟証言をうけ良政死亡

を一応確認したとした1918～1919年の時期ものしかない。しかも、1919年(6)宮崎は上海の邦字紙掲載という日本国内にはほとんど影響力がないとおもわれるものであり、1930年の村松の直前のもので良政を伝えるものとしては、1926年に覆刻された宮崎滔天の『三十三年之夢』しかないのである。換言すれば、当時として良政遭難は決してよく知られた出来事ではなく、人々の記憶のなかでうすらいでいくものだったといえるのではないか。そのなかで出た(9)村松は、発表されたのが1928年の済南事件から1931年の満洲事変へと向かう日中関係悪化の流れに出たものであることに注目すべきだと考える。つまり日中関係を考える材料としてとりあげられたのではないだろうか。また、1939年の(12)米内山によるものも村松と同様であると考え。この年、南京には日本の傀儡政権である中華民国維新政府が成立し、汪兆銘政権樹立へと向かっている最中であった。すでに日本の侵略は公然となっていたけれども、ここでもやはり日中関係を考えるきっかけとして良政が出てきたのではないだろうか。

### おわりに

さまざまな良政伝を比較から、時を経るにしたがって次第に不確かな事柄が付加されていく傾向にあることがみてとれた。それは伝説化あるいは物語化といってもよいだろう。徹底した調査による前掲上村希美雄『宮崎兄弟伝』にしても資料的に不確かな事柄をあげているほどなのである。さきに、戦前のものについては、発表時期との関係から意味を読み取ることができる可能性を指摘したが、戦後のものについても、それらがもつ意味

を考えていくことが今後の課題となろう。とくに、どうして良政の事績を歴史的事実としてよりも物語的に伝えることがくりかえされるのか、という点を考察していかなければならない。

また、今回の良政伝の比較を通してうかびあがったもうひとつの課題として、山田良政の思想、精神、宗教といった内面的な事柄を考察しなければならないということもあげたい。(9)村松は、良政らしき人物は宣教師と間違えられたと述べているが、その真偽はともかく、実際かれとキリスト教のかかわりは深かった。山田良政が育った当時の弘前は「弘前バンド」といってよいほどキリスト教の活動が盛んだったのである<sup>53</sup>。また、良政自身もキリスト教系の東興義塾で教育を受け、在京時には牛込教会に通い英語で聖書を学び、上海時代にはキリスト教青年会を組織したともいう<sup>54</sup>。このキリスト教とのかかわりを軸にしてかれが参加した革命関係者をみると、よく知られているように孫文自身がキリスト教信者であったし、鄭士良も信者であった<sup>55</sup>。ほかにも宮崎滔天も一時キリスト教に傾倒していた事実があり、たとえば宮崎は、「若し史堅如を天使と評し得べくんば、彼は正しく予言者の性格を備へた人と云ふべきである」<sup>56</sup>と、親しい友人を悼むのに「天使」、「予言者」とキリスト教的な言辞を用いているほどなのである。また、惠州事件で爆弾テロを試み刑死した史堅如についてもキリスト教的傾向がみられる<sup>57</sup>。そして、これらの人々は、革命に対して真摯であったとされる人物であった。山田良政をふくむかれらがキリスト教信者あるいはそれに準じる親派たちである以上、キリスト教的な側面からも山田やその同志たちを考察する必要があるはずである。



- 1 山田良政 (1868 ~ 1900) 青森県弘前生まれ。幼名は良吉、字は子淵。叔父菊池九郎の東奥義塾、青森師範学校、東京の水産伝習所で学ぶ。日本昆布会社での上海勤務を経て通訳官として日清戦争に従軍。その後、日本に亡命していた孫文の協力者となる。南京同文書院の教員となるもの間もなく出奔、惠州事件に参加し遭難した。かれについての文章で簡便なものとしては、田中健之「日本の中の近代アジア史 中華革命に殉じた日本人山田良政」(『中央公論』第122年第6号第1478号、中央公論社、pp.248-251)、学術的なものとしては馬場毅「孫文と山田兄弟」(『愛知大学国際問題研究所紀要』第126号、2005年10月、pp.97-111)、本格的な伝記には、結束博治『醇なる日本人 孫文革命と山田良政・純三郎』(プレジデント社、1992年)、保坂正康『仁あり義あり、心は天下あり 孫文の辛亥革命を助けた日本人』(朝日ソノラマ、1992年)がある。
- 2 宮崎龍介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』第1巻(平凡社、1971年7月29日) pp.215-216。
- 3 宮崎龍介・小野川秀美編、前掲書第1巻、p.281。
- 4 庚子又八月 1900年10月のこと。
- 5 長塩守旦『日中提携してアジアを興す 第1集 孫文革命の成敗と日本』(志学社、2000年10月1日) p.350。
- 6 宮崎龍介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』第4巻(平凡社、1973年11月16日) p.298。
- 7 宮崎龍介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』第2巻(平凡社、1971年12月13日) pp.55 8-559。
- 8 上村希美雄『宮崎兄弟伝 アジア篇』(上)(葦書房、1987年6月20日) pp.402-403。
- 9 孫文「山田良政君建碑紀念詞」佐藤慎一郎「孫文と山田良政」(長塩、前掲書、p.372。初出『大亜細亜』第9巻第10号、大亜細亜社、1941年)は1920年のものとするが、本稿では結束博治「山田良政・純三郎兄弟年譜」(『醇なる日本人 孫文革命と山田良政・純三郎』プレジデント社、1992年9月6日)にしたがい1919年とした。なお、引用には佐藤前掲文を用いた。
- 10 村松梢風(1889 ~ 1961) 本名義一。静岡県出身。小説家、評論家、エッセイスト。なお、長塩前掲書では「松村梢風」とあるが、『中央公論総目次 創刊号より第一〇〇〇号まで』(中央公論社、1971年11月20日、p.197)には「村松梢風『中国革命夜話』」とあることから、正しくは「村松」である。
- 11 長塩、前掲書、pp.353-355。
- 12 蔡標 洪兆麟の部下に蔡標なる人物がいたのかはわからない。兵庫県立歴史博物館所蔵「王敬祥関係文書」にふくまれている「陳豫借王敬祥款收據」(1908年5月29日)には保証人として「蔡標」という名をみることができが村松が伝えた人物と同一なのかは不明。なお、「王敬祥関係文書」は、神戸大学付属図書館によって電子化され公開されている。( <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/products/okeisho/index.html> ) (2008年3月4日現在)
- 13 李福林(1872 ~ 1952) 広州の人。広州在地の武装勢力「福軍」の指導者。孫文を支持し、広州市長、国民革命軍第5軍長をつとめた。
- 14 『新校本清史稿』「表四十 各省総督 河漕督附」によれば、1900年9月26日付(光緒26年閏8月3日)で両広総督職は徳寿から陶模に代っている。しかし、本文で後述するように「頭品頂戴兼署兩廣總督廣東巡撫徳寿」による同年11月5日付奏摺があり、実際の鎮圧にあたったのは両広総督代理であった廣東巡撫の徳寿であると考えられる。
- 15 東亜同文会編『対支回顧録』下巻(1936年4月) p.882。
- 16 葛生能久『東亜先覚志士伝記』下巻(黒龍会出版部、1936年10月) pp.455-456。
- 17 米内山庸夫 東亜同文書院出身(第8期)。卒業後、外務省に入り外交官として活躍している。
- 18 乾児 父子の誓いをした子の方。いわゆる子分。
- 19 「清粵督徳寿奏報惠州革命起事摺」 頭品頂戴兼署兩廣總督廣東巡撫徳寿「奏為廣東惠州會匪被外匪勾結餘匪起事派營剿辦獲勝並仍飭搜捕餘匪情形事(附一：貨成各營分投搜捕惠州餘匪片)(附二：奏准交卸柳慶鎮總兵片)(附三：陳廣東歸善縣霞涌一帶分界與設汛情形片)」1900年11月5日(光緒26年9月14日)(台湾国立故宫博物院所蔵「宮中檔奏摺・光緒朝」文獻編号408003340)のことである。米内山は原文をみたのではないようである。かれが引用した文章は「~未知是否確實、此閏八月廿七日~」となっているが、原文では「~未知是否確實、同日何長清率隊進攻三洲田~」になっており両者は異なる。馮自由『革命逸史』収録の「庚子惠州三洲田革命軍実録」に米内山が引いたものと同じ文章があることから米内山は馮のものを参考にしたと考えられる。
- 20 長塩、前掲書、pp.365-368。
- 21 奏摺 上奏文の形式のひとつ。高級官僚が内閣を通さず直接皇帝に上奏するものをさす。
- 22 宮崎滔天『三十三年之夢』宮崎龍介・小野川秀美編、前掲書第1巻 p.213。
- 23 (豊島捨松発背木周蔵宛)「機密受第3306号 外機第41号」1900年10月16日、JACAR(アジア歴史資料センター <http://>

/www.jacar.go.jp/) Ref. B03050065100 (第18画像)、各国内政関係雑纂／支那ノ部／革命党関係(亡命者ヲ含ム)第二卷(1-6)(外務省外交史料館)(2008年3月5日現在)。「機密受第3306号 外機第41号 本月一日附別紙電報並ニ二日附機密第一四号ヲ以テ御来示シ趣キテ承致候然ルニ孫逸仙ノ隠謀ニ関シ山田良政(田山良介トモ云フ青森県弘前人)ナル者ヨリ在当港ノ知人ヘ私信ニ擬レバ孫逸仙ハ台湾ニ於テ台湾總督ノ南清ニ対スル経略ヲ未タ思ヒ止マラザル旨ヲ伝聞シ大ニ喜ビ広東省潮州及ヒ惠州ノ間ニ於テ事ヲ挙クルトニ決定シタルヲ以テ山田良政ハ其準備ノ為メ香港ヘ出發スル旨申来リ且ツ孫逸仙等事ヲ挙クルヤ台湾ヨリ日本兵ヲ厦門ノ南方雲霄県銅山港ヘ上陸セシムル計画ノ由聞及候山田良政ナル者ハ支那服ヲ着シ向ニ在南京ノ同文会設立ニ係ル日本語学校ノ幹事タリシ者有之候右不取敢御報申進候敬具 明治三十三年十月十六日 領事豊嶋捨松 外務大臣青木周藏殿」

- 24 東亜同文会機関誌『支那』財団法人東亜同文会「自昭和二年十月至昭和三年三月 事業報告」(1928年)によれば発行部数1,500。その内訳は「直接購買者 469 商店委託 429 起稿家及関係先配布 424 広告募集用 100 納本其他 10 残部 68」というものであった。
- 25 長塩、前掲書、p.370。
- 26 長塩、前掲書、p.371。
- 27 長塩、前掲書、p.372。
- 28 水野梅暁(1877～1949) 広島県出身。東亜同文書院卒(第1期)。浄土真宗本願寺派の僧侶。満日文化協会創設にかかわるなど日中の文化交流に積極的にかかわった。
- 29 長塩、前掲書、p.384。
- 30 長塩、前掲書、p.354。
- 31 長塩、前掲書、p.391。
- 32 長塩、前掲書、p.390。
- 33 洪兆麟(1872-1925) 字は湘臣。湖南寧郷の人。陳炯明系の軍人。清では營長であったという。1911年辛亥革命では革命側にたち惠州を攻略、惠州軍務督弁となる。1913年第二革命で敗れると日本亡命。広東潜伏中の1915年1月に香港当局に追放処分をうけるものの、同年12月第三革命で復権。広東軍政府では、1918年1月陳炯明麾下の援閩粵軍第5支隊司令として福建に入り福建省石碼鎮守使。1920年陳炯明の広東進攻に従軍、粵軍第1軍第2師師長。1921年、第7区善後処長。1922年には孫文と離反した陳炯明に従い、10月援閩総司令。1923年5月粵軍潮梅総指揮兼第2軍軍長、同年末粵軍各路副総指揮。また、北京政府から1923年洪威將軍を受け、あわせて広東陸軍第3師師長、汕頭防務督弁に任じられている。1924年5月潮海鎮守使。1925年2月段祺瑞臨時執政政権下での善後会議の会員。同年12月7日、香港から上海に向う船上で銃撃され同日9日死亡した。以下参照、支那研究会編『最新支那官紳録』(北京 支那研究会、1918年8月20日 同25日再版)、外務省情報部編纂『現代支那人名鑑』(東亜同文会調査部、1925年3月10日)、外務省情報部編纂『改訂 現代支那人名鑑』(東亜同文会調査部、1928年10月15日)(以上3点は日本図書センター『中国人名資料事典』(1999年8月25日)による復刻)、張宪文、方庆秋、黄美真主編『中华民国史大辞典』(南京 江苏古籍出版社、2001年8月)。
- 34 長塩、前掲書、p.389。
- 35 長塩、前掲書、p.388。
- 36 長塩、前掲書、p.395。
- 37 長塩、前掲書、p.399。
- 38 長塩、前掲書、p.412。
- 39 保坂、前掲書、p.117。
- 40 長塩、前掲書、p.416。
- 41 上村、前掲書、p.416。
- 42 原子昭三『津軽奇人伝説』(青森県教育振興会、1987年12月1日) p.39。
- 43 良政の所持金の額 前掲上村も、村松が「香港紙幣二千弗」としていたものを「千ドル」としていることからすると、『中央公論』掲載の村松の原文が「香港紙幣一千弗」であったのかもしれない。論者が参考にした村松のテキストは、『中央公論』の原文ではなく長塩前掲書収録のものである。
- 44 保坂、前掲書、p.116。
- 45 結束、前掲書、p.82。
- 46 田中健之「日本の中の近代アジア史 中華革命に殉じた日本人山田良政」『中央公論』第122年第6号第1478号(2007年6月) p.251。



- 47 JACAR Ref. B0305006500 (第9画像)、各国内政関係雑纂／支那ノ部／革命党関係(亡命者含ム)第二卷(1-6)。この電文に日付は記載されていないが、文中の「舞鶴丸」は大阪商船による淡水-香港線に就航していた船である。良政が乗船した当時のものではないが、起点を淡水から基隆に移した後の『台湾航路案内大阪商船昭和五年版』によれば、基隆を午前9時出航、翌朝午前8時廈門着、同日午後4時廈門出航、翌朝汕頭着、同日午後4時汕頭出航、翌朝午前8時香港着、とある。これを参考にすれば、良政は10月9日午前に大阪商船淡水-香港線舞鶴丸に乗船し10月10日朝に廈門、そのまま午後4時出航し、10月11日朝に汕頭に入ったのであろう。
- 48 在廈門土井陸軍大尉發寺内正毅參謀本部次長宛10月10日付け電信、JACAR Ref. B0305006500 (第17画像)、各国内政関係雑纂／支那ノ部／革命党関係(亡命者含ム)第二卷(1-6)。
- 49 廈門上野領事發青木周蔵外務大臣宛10月12日付け電信、JACAR Ref. B0305006500 (第18～19画像)、各国内政関係雑纂／支那ノ部／革命党関係(亡命者含ム)第二卷(1-6)。
- 50 「在廈門土井大尉報告」(寺内正毅陸軍參謀本部次長發内田康哉外務省総務長官宛11月2日提出文書同封)、JACAR Ref. B0305006500 (第24画像)、各国内政関係雑纂／支那ノ部／革命党関係(亡命者含ム)第二卷(1-6)。なお、この報告書の作成者について、上村希美雄は「森村大尉」(p.415)としている。原文には作成者氏名部分を修正した跡があり、「土井」とも「森村」とも読めるが、本稿では注48前掲の土井大尉發寺内次長電文があることから「土井」とした。
- 51 洪兆麟証言 証言したとされる時期に諸説ある。(6) 宮崎では1918年春、(9) 村松と(11) 寫生では1917年、(22) 田中の1913年とそれぞれ記されている。1913年説は、本文で述べたように事実関係を混同しているものとおもわれる。1918年説については、洪兆麟証言をうけて、上海の追悼会や遭難したとされた地の土を持ち持ち帰り良政の葬儀が行われたのがこの年であり、3説のなかではもっとも有力である。しかし、1918年初頭より洪兆麟をふくむ陳炯明麾下の部隊は福建省に進攻しており、作戦行動中にそのようなやりとりがおこなわれていたとする点にやや疑問が残る。そこに注目すると、1917年10月という説も妥当である。
- 52 島田慶次・近藤秀樹校注「三十三年の夢」(岩波文庫、1993年5月) p.449。
- 53 「弘前バンド」 本多庸一、菊池九郎たちを中心に、キリスト教的教育をおこなう東奥義塾を拠点として当時の弘前はキリスト教的活動が盛んであったという。たとえば、良政の父浩蔵の妹でキリスト教信者菊池九郎の妻である久満子は後年青山学院で活躍する本多庸一から受洗し、良政の祖母にあたる菊池幾久子はジョン・イングから洗礼をうけているという。相沢文蔵「津軽を拓いた人々 津軽の近代化とキリスト教」(弘前学院、2003年6月25日) p.158。
- 54 山田良政純三郎兄弟とキリスト教については、相沢前掲「津軽を拓いた人々 津軽の近代化とキリスト教」に詳しい。同書のなかでは、中国にいた良政が両親宛の手紙のなかで純三郎を教会に通わせるようにと述べたものがあることや、純三郎自身が1893年に洗礼をうけているとしている(相沢、前掲「津軽を拓いた人々 津軽の近代化とキリスト教」、pp.219-220)。また、上海でキリスト教青年会を結成した当時について、「エバンス書店」の主人が良政と知り合いであるといわれている(原子、前掲書、pp.40-41)。この書店がどういったものか不明であるが、池田鮮「曇り日の虹：上海日本人YMCA40年史」(上海日本人YMCA40年史刊行会、1995年)によれば、1889年～1899年にかけて上海の日本人に伝道した宣教師としてエドワード・エバンスが紹介されている。この宣教師エバンスと「エバンス書店」が関係あるならば、良政とキリスト教を結ぶ線のひとつとなろう。また、良政の妻敏子もキリスト教信者である(相沢、前掲「津軽を拓いた人々 津軽の近代化とキリスト教」、pp.221-223)。
- 55 島田慶次・近藤秀樹校注、前掲書、pp.432-432。
- 56 宮崎滔天「亡友録／山田良政君」宮崎龍介・小野川秀美編、前掲書第2巻、p.559。
- 57 史堅如のキリスト教的な面については、宮崎滔天が「彼〔史堅如〕の兄さんは耶蘇教徒である。故に彼の思想の根本は耶蘇教に胚胎してるやうに思はれた」(「支那革命物語」宮崎龍介・小野川秀美編、前掲書第1巻、p.418)と感想を述べている。

なお、引用に際しては、原文中の旧字を新字体にあらためた。引用文中の〔 〕は筆者による補記である。